

面に付着している。

本植物の幼体は「ひわ色」を呈し、成体は「こび色」を呈し、表面に半球上の凹凸の著しいことも、よく本種の特徴をあらわしている。

本植物の同定並びに御指導を受けた神戸大学理学部広瀬弘幸教授に感謝します。

(岡山大学温泉研究所)

新 著 紹 介

テイラー 著

北アメリカ北東沿岸産海藻 (1957) [改訂版]

W. R. TAYLOR: Marine Algae of the Northeastern coast of
North America (1957) Second revised edition
—Ann Arbor The University of Michigan Press—
(Price \$ 12.5)

本書は已に著者が1937年に同題で出版したものの改訂版で、初版が出された時大讃辞を以て迎へられたものである。往時の *The Biologist* 誌の書評に、「本書は極めて卓越したものであり……、これは著者が永年ウヅホールの臨海実験所に於て教鞭をとつた豊富な経験とその造詣深い海藻の知識から生れたもので、アメリカではこの著に匹敵するものは見当らない」と。斯様に北アメリカ大西洋岸のフロラを究明した本書は分類学的又形態学的研究に於て高く評価され、従来諸国の藻類学者によつて引用され、且重要な文献として挙げられてきた。爾来星霜を重ねること20年、茲に著者が種々のデータを追加し面目を一新して改訂版を世におくつたことは極めて有意義のことと惟う。此の改訂版は現在の分類学上の成果や命名法の最新のものを取り入れた正に北アメリカ北東沿岸産海藻の集大成であり、宝典であると云つても過言ではあるまい。

又本書はミシガン大学科学叢書18巻に該当している。著者は本書出版の為に25年間の協力と激励を惜しまなかつたジーン・グラント・テイラー夫人に対する最大の謝辞を述べて巻頭を飾つている。

以下順次紙面の許す限り内容に触れてみたいと思う。本書は全500余頁の大著であり、初版よりも約80頁の増加である。序(2頁)、緒論(24頁)、分類表(9頁)、記載(315頁)、文献(18頁)、図版(60枚)、同説明(60頁)、索引(19頁)に大別できる。()内は使用頁数及び枚数を示したのである。

[序] ここでは改訂版出版の必要性とその経緯及び援助を受けた各位への謝辞がのべられている。特に図版の多くはチン・チャー・ジャオ博士の手をわづらわしたことを述べてそ

の好意に感謝している。又近々 15 年間海藻の生活史と形態に関する研究が頻繁になり、そして種類の同定のメルクマールや記載等の新しいデーターをどしどしとり入れたので予想外に増頁になつたと云う。

〔緒論〕 本書に挙げられた調査対象範囲は極めて広く、バージニアから北アメリカの北端より遥か北方に至り、西端はハドソン湾を含んでいる。これら広大な地域を行政区劃並びに地理学的名称を用いて説明している。地理的分布に関しては夙にハーバー及びファーロー等が Cape Cod を境界として北方性フロラと南方性フロラに分けていたが、著者は若干のステーションを設定して詳細に検討し必らずしも同意見ではない様である。海藻の習性にも触れているが特に海藻群落及びその消長等を取扱う生態学は本書の目的ではないとして、その生育環境との関係をステーション別に軽くのべている程度である。次に採集と保存に就いて述べるところをみるに、現在のアメリカの藻類学者が行つている採集方法及び保存の為どの様な注意を払つているかを伺い知ることができて、大変興味深く又参考になると思う。要するに日本の現状と比較して大差ないことが了解できるであろう。磯採集時の携帯用品、服装、潮汐等のごく一般的知識を述べているが、流石にプラスチック製の容器、殊に広口瓶等を可成り利用していること、服装は木綿のシャツとズボンが堅牢で然も潮水に都合のよいこと、又履物は日本の様に便利で安上りの藁草履がないらしくズック靴を用いるが、その底は厚いゴムびきで而も深い皺のついたものがよいと推奨していること、又潮汐表をみて採集日程を定め更に最も海岸に近い町の新聞が地方低潮時刻を毎日報導していること等を述べている。少し深い海水の澄んだ処ではガラス底の箱即ち「のぞき」を用いており、6 呎までは標品を確認できるという。「まんぐわ」も勿論使用している。これ以上の深処ではドレッジや潜水具を用いて採集を行つている。海藻の保存は液漬と脂葉の 2 通りであることは論を俟たない。普通の保存液は 4% ホルマリン液を用い、繊細な種類では弱ホルマリン液に 30% のアルコールを加へる、然し萬能保存液としては、50~70% のアルコールであるという。又塩漬保存もする。採集品を輸送する場合に、気楽に航空便を利用したり、魔法瓶を使用すること等が一寸珍しく思へる。次に研究史の項では、アメリカの海藻研究は 19 世紀前半は只ヨーロッパの雑誌に散見する程度であるが、何といつても本格的な研究の出発はダブリンのハーバー教授が出張講義でアメリカに滞在し、Florida から Nova-Scotia のステーションで仕事をして、他の研究者の採集品と共に *Nereis Boreali-Americana* 3 巻を著作したことに始まるとした。更にコリンスは多くの協同者と共に *Phycotheca Boreali-Americana* を出版し、又ファーロー、ハウ、セッチェルを始め多くの学者が輩出したこと、そして彼等の業績や採集品の保管先が茲で詳しく述べられている。最後に本書の目的と範囲を、海藻種名の同定の為よりよき案内書となるであろうと結んでいる。

〔分類表〕 本書で取扱つた海藻の種類が一見して分る。種名及び属名はアルファベット順に配列してある。ここには変種や品種は出ていないがそれらは次の記載に出ている。

分種表にでてゐる種類は 401 種である。

〔記載〕 ここでは、目・科・属及び種の検索をとり入れ、500 以上の記載が行われている。取扱つた数は前記した如く 401 種が権威を以て報告されており、そしてこれらの変種及び品種が 134 つけ加へられている。

終りに改訂版(1957)と初版(1937)の両方を照合し、海藻の取扱い方の差異の主なものを持つてみると、先ず 1937 年版では緑藻門、褐藻門、紅藻門の 3 門であつたが、1957 年版では緑藻と褐藻の間に Xanthophyceae 門を設けたこと、即ち本改訂版では 4 門を取扱つてゐることを挙げなければならない。

次に改訂版と初版を順次みて行くと、改訂版にのみ新しくみられる名前と初版にあつたが改訂版にみられなくなつた名前があるのでこれを持つてみた。新たにみられる綱名は Heterosiphonales (Xanthophyceae) で、みられなくなつた綱名は Tilopteridales (褐藻類) である。新たにみられる科名は Chaetopeltidaceae, Gomontiaceae (以上緑藻類); Acrothricaceae, Punctariaceae, Sargassaceae (以上褐藻類); Acrochaetiaceae, Furcellariaceae (以上紅藻類)。みられなくなつた科名は Trentepohliaceae (緑藻類); Asperococcaceae (褐藻類); Chantransiaceae (紅藻類)。亦新たにみられる属名では、*Chlorococcum*, *Ectochaete*, *Diplochaete*, *Urospora* (以上緑藻類); *Giffordia*, *Eudesme*, *Sphaerotrichia*, *Stiloptera* (以上褐藻類); *Furcellaria*, *Ptilota* (以上紅藻類)。そしてみられなくなつた属名は *Hormiscia* (緑藻類); *Aegira*, *Mesogloia*, *Phloeospora*, *Gobia*, *Phyllaria* (以上褐藻類); *Colaconema* (紅藻類) 等である。種名、変種名、品種名等についてはこれを省略する。亦科・属のシノニウムも省略する。褐藻類の Stilophoraceae は初版では Punctariales の中にあつたが、改訂版では Chordariales の中に移つてゐる。

(舟橋説往——北海道大学理学部植物学教室)

学会録事

藻類関係者の集まり

昭和 32 年度日本水産学会秋季大会第 1 日の 10 月 9 日午後 6 時から、函館市湯川町有鄰荘に於て、藻類関係者の親睦を兼ねて談話会を開催した。出席者は 20 名で時田郎博士の挨拶の後、瀬川宗吉博士から「琉球の話」と題する肩の凝らない内容豊かな、琉球の旅の思い出話などあり、各種の趣味的なコレクションを回覧し乍ら、彼地の最近の情勢と、琉球の藻類の生態の輪廓、特にその水平並びに垂直分布に就ての報告があつてから、和やかな雰囲気の中に会食に移つた。

談笑の間に食事を摂り乍ら、順次自己紹介を行い、多くの思い出話や活潑な希望、建設的な意見など出て、名残りのつきないままに午後 9 時過ぎ散会した。

函館では昭和 27 年 9 月 26 日に当時の日本水産学会秋季大会に出席した数名の有志